資料紹介

柳原英日記（上）

― 二十世紀初頭の第三高等学校と三高生 ―

田中　智子†

はじめに

旧制高等学校は、主に社会学の領域において、近代日本のエリート階層を形作った独特な教育の場として論じられてきた。その際にまず描かれる典型像は、東京の第一高等学校（一高）であり、一高生であったといってよい。そして、往々にしてそれと対極的なイメージで語られてきたのが第三高等学校（三高）であり、三高生である。

旧制高等学校の社会学的研究をリードしてきた竹内洋は、その包括的論考、『日本の近代 12　学歴貴族の栄光と挫折』（中央公論新社　1999 年）において、三高には平民出身者が多く、京都という土地柄のなかで「町人的エートス」を濃厚に帯びたことと、「為さざることによって為す」を持論とする折田校長の教育理念とがあいまって、一高のような「悲憤慷慨」「剛毅朴訥」といった「武士的エートス」に支配されない、自由な校風が可能となったとする。ただ同書の統計によれば、二十世紀に入る頃になると、他の高等学校の平民の割合も増え、三高と他との出身階層差はそれほどみられなくなっている。また、折田校長も 1910（明治 43）年には退任する。ということは、三高の校風の大本は、二十世紀初頭までに形成されていたということになろう。

一方、三高の唯一の概説的書物として長年利用されてきた三高同窓会編『神陵史』（1980 年）は、「大学予科としての第三高等学校が安定期にさしかかり、校風形成の緒についた明治三十年代なかば」という見解を示している。たしかに、『逍遥の歌』（1905 年作）、一高戦（1906 年開始）などの歴史は、二十世紀初頭に始まり、以後三高の名物として認識されていく。

このように、三高の「校風」といったときに念頭におかれる事柄や想定される形成時期は、実はまちまちである。一高および一高像が、統計分析をはじめ、校内誌『校友会雑誌』をはじめとする雑誌類、あるいは著名な卒業生の自伝・回想録・小説類の検討などの手法によって、具体性・実証性をもって描かれてきたのに対し、三高と三高生については、イメージ先行の感がなきにしもあらずである。例えば、基礎史料の一つに、校友組織である嶽水会の機関誌『嶽水会雑誌』があるが、雑誌全体の特性についても個々の所収記事の内容についても分析は手薄であるし、私的記録の収集・検討にも多くの余地が残されている。前掲『神陵史』には事実誤認を含む記述を多々見出し得るし、学術的研究という評価は下しにくい。

本格的研究の乏しさの背景としてひとつ指摘できることは、戦後に三高を包摂した京都大学における年史編纂事業のあり方である。1897（明治

† 京都大学大学文書館教務補佐員

30）年の京都帝国大学創設から七十年あるいは百年といった画期に編まれてきた年史類は、その発想に基づけば、大学創設の経緯から話を説き起こせばよいものだといえる。しかし、それより約三十年も前の1869（明治2）年に開講した大阪舎密局に起源を遡り、京都帝大発足とも浅からぬ関係をもった第三高等学校の歴史の価値を無視することができなかったためであろう、これを「前身校」と名付け、叙述の対象としてきたのが京大の年史類であった。しかし1897年以降については、本来の主語である京都帝大の歴史が始まるのに伴い、三高の歴史は叙述の対象外とされた。以後三高は、1950（昭和25）年に京大に組み込まれて消滅する経緯の叙述に至るまで登場しない。つまり、1897年から約五十年間の三高の歴史は、京大の正史的な書物である年史のなかでは、忘れ去られた存在となってきたのである。年史編纂は近年、学問的水準の高さが目指されるようになり、資料編の刊行を通して学術研究に必要な史料の発掘や翻刻が行われてきている。しかし、舎密局以来三十年の歴史はともかくも[1]、ほぼ二十世紀前半と重なる以後半世紀の三高の歴史は、その対象からもれ続けていたということになる。

現在の京都大学のもつ肯定的イメージとしてしばしば謳い文句とされる「自由」は、滝川事件に代表される京都帝大の大学自治の歴史と並び、三高のいわゆる「自由の校風」に負うところが大きいと思われるが、実のところそれは多分にイメージの域を越えず、本格的検証はこれからであるといえよう。実態と言説とを区別し、「自由」や「校風」の内実を確定していく必要がある。

さて、本稿は、二十世紀初頭の三高生、柳原英の日記という私的文書を検討することを通じ、いわば空白期の三高像および三高生像の再構築に、いささかなりとも寄与することを目指すものである。現在、基礎史料中の基礎史料である三高の公文書類は未公開扱いとなっており、一刻も早い公開が待たれるが、そうした状況を補う意味で、また公文書にはあらわれにくい三高と三高生の実態を把握する上でも、価値のある一次史料だと考えられる。

まず、柳原英と関係史料について説明しておく。

柳原英は1887（明治20）年1月9日、広島県賀茂郡仁方の相原巖・ツタ夫妻のもとに生まれた。「柳原」は、加茂郡阿賀町冠崎の医師、柳原元碩・睦子夫妻の養子となった後の姓である。広高等小学校、忠海中学校を経て、1905（明治38）年9月に三高の三部（医科進学課程）に入学した。卒業は1908（明治41）年7月であり、京都帝国大学医科大学に進学した。大学卒業後は京都帝国大学、大連病院、広島県立大学などに勤務し、医学者・医師としての生涯を送った[2]。

2001（平成13）年9月、広島歴史資料ネットワークが芸予地震に伴う呉市柳原家からの史料救出作業を行った際、そのうちの柳原英に関係する史料の保存について遺族から相談があった。医療器具は、彼が晩年勤務した広島県立医学専門学校・広島県立医科大学の後身である広島大学医学部の附属医学資料館へと寄贈されたが、文書・写真類については一括整理・保存のメリットが認識され、彼が三高・京都帝大に長く関わったと判断されたことから、すべて京都大学大学文書館へ寄贈されることとなった。この史料群は総計約4000点に上るが、彼の家族間に交わされた第三者間書簡も多く含み、正確には、柳原英を中心とした柳原家の関係史料と呼ぶべき性格をもつ。2002（平成14）年2月に搬入作業が行われ、すでに整理済である。

柳原英の三高時代に関わる史料は書簡・日記・授業ノートの三種に分類されるが、本稿が主題とするのはこのうちの日記である[3]。「寺姉上亀慶製」（寺町姉小路上ル所在の店舗「亀慶」の意であろう）と刷り込まれた縦罫入り和紙の和綴じ帳（表紙紫色・縦222mm×横157mm）に毛筆で書

き綴られた一冊であり、三年次在籍中の1907（明40）年9月8日から翌年4月19日まで、毎日欠くことなく記された。

在学中の彼がこれ以外の期間に日記をつけていたかどうかであるが、前年6月から11月まで記された一冊を除けば該当史料は見当たらず、強制力のある日課として取り組まれた可能性はほとんどない。旧制高校生の日記といえば、同時代の一高卒業生阿部次郎による『三太郎の日記』が有名であるが、これと柳原の日記は全く異なる性格をもつ。柳原の日記は、自らの思索過程を綴るといった性格をもたず、淡々とした日録風の内容をもつ。また『三太郎の日記』のような創作性をもたないし、基本的には公表を前提としない私的な営みであった。しかし「入洛の記」と題して始まる冒頭部分は多分に文芸的であり、特に、「両丹修学旅行之記」と名打たれた修学旅行の記録は、『嶽水会雑誌』第38号（1907年12月）の付録「両丹修学旅行記事」に、他の生徒の書いた同様の旅行記録が多く掲載されていることから、ここへの投稿を念頭に置いて書かれた可能性もある。『嶽水会雑誌』には、1900年前後より旅行記的な文章が散見することから、同誌が彼の「書く」行為の原動力となったとは言えそうである。

紙数の関係上、今回はその前半部にあたる1907（明治40）年9月から11月までの部分を、日記末尾に独立して書かれた修学旅行の記録を含めて翻刻し、考察の対象とする（なお、本稿には日記本文の写真とともに、内容に関連する写真を二葉添えたが、いずれも柳原の遺した史料ではなく、別の三高生遺族からそれぞれに提供を受けた史料群中に偶然発見しえたものである）。

それでは以下、史料から読み取りうる問題群を順次列挙し考察していきたい。

Ⅰ．三高生の日常生活

①教師と授業

史料中には、様々な三高の教師たちが登場する。以下50音順に列挙すると、伊藤小三郎（ラテン語）、大井和久（ドイツ語）、賀来熊太郎（＊ドイツ語）、岸喜鑑（化学）、グートリッチ（英語）、厨川辰夫（＊英語）、玉名程三（物理）、中村健一郎（ドイツ語）、野々村直太郎（＊倫理学）、林和太郎（＊）、ブラッシュ（ドイツ語）、森総之助（物理）といった面々である（（　）内は本日記から確認される担当科目、＊を付けたのは、自身も三高もしくはその前身校出身の人物）。担当科目は、必ずしも『第三高等学校一覧』各年次に記された科目とは一致しない。能力に応じて、柔軟な割り振りが行われていたものと思われる。

このうち印象的に語られるのは、縦横無尽に熱弁を振るう野々村教授の講義である（9.19　以下同様に、該当する記述の日付を付す）。また、五高を経てこの年次から着任した厨川教授の授業レベルの高さもうかがわれる（9.21）。一方、高校時代の意味は友をつくることと読書力を養うことにありと、自身の過去に言及しつつ演説している厨川は、気難しい学者といった印象とは別の顔をもみせている（10.16）。

授業以外での教師と生徒の関係であるが、生徒監および教務取扱心得の職にあった林は、柳原の保証人を務めている。制度としての保証人は、規則において「入学者の在学中に関わる一切の事件を引き受けることを保証する」人物とされたが、心当たりのない場合には、生徒監に依頼できたことがわかる。柳原は彼に進学の相談をしているが、生徒による教員の私宅訪問はしばしば行われていたようである（9.17、11.11）。

なお、全体を通じて目立つのが教員の休講の多さである。何か特別な催しが開かれたり生徒の求めがあったりした場合、簡単に休講としてしまう慣習があったようだ。

柳原の学習態度であるが、理科系の生徒らしく、化学や物理の実験に多くのエネルギーが費やされ

ている。晩の予習復習はしたりしなかったりである。語学は英語とドイツ語を履修している。旧制高等学校ではドイツ語由来の独特の用語が使われたことは有名であるが、この日記にまだそうした語句は登場しない。しかしドイツ語の引用は始まっている（9.20）。フランス語に関しては、一高以外に学科はなく、三高では1910（明治43）年4月からの制度導入となるが、それ以前に仏語研究会が設置されており、中村教授の指導を仰いでいることが目を引く（10.5、10.26）。ラテン語も含め、柳原の語学への関心は高い。

②進学問題

三年次在学中の柳原にとって気にかかるのは、翌年に控えた大学進学問題であった。彼は進学先を東京帝大医科にするか京都帝大医科にするか迷っていたようだ。保証人の林和太郎からは、学科目こそ東京の方が多いが、京都は臨床の機会が多いという助言を得ている（9.17）。一年後、彼は京都帝大に進学した。

注目すべきは、一高の三部生徒から三高の三部生徒に対し、大学入学の不公平さを訴える書簡が送られていることである（10.11）。おそらく、共同戦線を張って学校側や文部省に建白することを促したものであろう。

高等学校生徒は希望する分科大学に入学できるとする基本方針は、東京帝大と京都帝大に共通であったが、ここで問題となるのは、定員超過の場合であった[(4)]。東京帝大は1898（明治31）年9月27日の規定により、希望者全員に仮入学を許した上で、高等学校で履修した科目について試験を行い入学者を定めることとしていた。ただ、1905（明治38）年5月23日の評議会は、場合によっては各分科大学ごとに細則を定めて、試験を行わないこともあるととり決めた。対する京都帝国大学は、1904（明治37）年9月1日の達示第9号により新通則を定めたが、入学に関しては、人数超過の場合は仮入学を許し、選抜試験を行って順次入学を確定するとした。しかし場合によっては試験を実施せず、卒業した高等学校の成績に従って入学順序を定めることもあると明記されていた。1897（明治30）年9月の旧通則に新たに加えられた点であり、東京帝大通則より具体的な但書である。

なぜこうした対応が生じ、また、一高三部医科生が学校の枠を超えて三高三部医科生に連帯を呼びかけるような事態がおこったのか。それは、福岡医科大学の設立を原因とする。1903（明治36）年4月、京都帝大には1899（明治32）年に発足した京都の医科大学とは別に、福岡医科大学が設置された。1911（明治44）年に九州帝国大学が創設され、その医科大学となるまで、京都帝大に所属して機能していた医科大学である。つまり、1903年から1910年の間において、他の学科専攻者の進路選択肢は東京と京都との二つであったが、医科志望者の眼前には、福岡を加えた三つの道が備えられていたことになる。

ここで参考となる回想録がある。三高三部卒業生松尾巌によれば、1904（明治37）年の春にも、一高との間で同様の問題が巻き起こっていた[(5)]。一高の生徒内に大学入学抽選制度をとなえる者が出現し、三高でもこれが議論となった。三年生松尾のクラスでは、高等学校在学三年間の成績で判断する方法、選抜試験方式、そして抽選方式の三通りのうち、一時の結果で判断される選抜試験や意味のない抽選は採用すべきでないと結論し、折田校長にその旨建白した。さらに4月、京都訪問中の文部省専門学務局長に陳情し、抽選ではなく成績によるとの言質を得、6月には文部省から、大学進学は高校在学中の成績によるとの正式通知を得たという。前述した京都帝大の同年9月の改正通則但書は、この生徒側の運動を受けての措置だったのではあるまいか。

一高ではこの年、23名の福岡医科大入学決定者が「告白」と題し、東京帝大入学がかなわなか

った悲運を嘆きつつも、福岡での健闘を誓う文章を新聞紙上に寄稿している[6]。三高の建白書にも、進学先が福岡と決まって、成績の悪い者が進学するところだと自らを侮辱するような言を吐くような生徒は、結局どこの学校に行ってもだめであると述べられていたという。松尾は学科内首席の成績で同年7月に三高を卒業し、京都帝大に進んだが、彼の学年における東京・京都・福岡の医科大学への進学者数はそれぞれ2、18、15名である[7]。東京・京都進学者の成績はまちまちであるが、福岡進学者全員が成績下位16名のうちに名を連ねており、やはり新設校の福岡医科大は設備面での不完全さもあって、三高でも人気がなかったことが確認できる。

さて、松尾の三学年下にあたる柳原の学年であるが、授業を休講にして一年から三年までの三部生徒全員が議論した結果、一高の建議には賛成しないこととなった（10.16、10.21）。一高側の建議はつまり、成績配分方ではなく選抜試験方式によりたいとの申出であり、1904年の抽選方式の提案と、思うところは一緒である[8]。試験方式ならば、一校からの進学者数にあらかじめ制限が生じてしまう配分法のような心配がない。頭脳の優秀さに自負を持ち、同じ東京の帝大への進学を常識として希望した一高生としては、配分方式は是認しがたい制度だったのであろう。三高生はこれに対して同調しなかった。

1908（明治41）年7月に卒業した柳原の級友の進学先は、東京2名、京都33名、福岡1名であった。東京帝大進学者はクラス内1、2位の成績、福岡進学者が最低で、その中間が京都進学者となっており、東京・京都間のヒエラルキーの誕生もうかがわれる。旧制高校生の受験競争が本格化するのは、旧制高校が続々と新設された1920年代半ばであるが、三部医科生にとって、二十世紀初頭はすでに受験に頭を悩まされる時代であった。

③交友関係

まず、出身地域と階層について確認しておこう。

三高に広島県出身の生徒は多くはなかった。例えば彼の学年全体をみても、209名中6名しかいない。そうした事情もあってか、同郷者の結びつきは強い。彼が卒業した忠海中学校の京都修学旅行に際しては、市中の卒業生が一丸となって歓迎会の準備に奔走している（10.22～25）。また、柳原が下宿で同居するのは、三高から京都帝大医学部に入学した一年先輩であるが、彼も広島出身であり、地縁によるつながりが推察される。

1889（明治22）年に前身の第三高等中学校が発足したときから、三高は士族に対する平民の割合が約二倍であり、逆に士族が平民の二倍近くを占めていた第一高等中学校や三倍以上を占めていた第五高等中学校と対照的であったことが竹内らにより指摘されているが、柳原の学年となると士族率はさらに減少し、209名中、四分の三近くの154名が平民出身者である。三部在籍者は37名中彼を含めた29名が平民で、二部（理・農・薬志望者）とともに、文科系志望者が集まる一部より平民率が高いことも特徴であり、出身階層がもたらす影響はさらに薄らいでいたものと判断できよう。

柳原の日常生活は、主に同級生との交流のなかで営まれていた。日記には多くのクラスメートが登場するが、例えばそのなかには、後に京都帝大医学部教授となり、1945（昭和20）年9月、原爆調査のため赴いた広島で山津波により殉職したことで知られる真下俊一がいる。彼らは日常的な話し相手、遊び仲間であった。クラス単位のまとまりも感じられ、折々に茸狩りやテニス紅白戦などのレクリエーションが企画されている（9.12、11.26）。気の合う仲間で、大原や高雄など遠方に足を延ばすこともあった（9.22、11.17）。

有名な「逍遥の歌」が誕生するのは、二年前の1905（明治38）年であるが、彼の日常はまさに

「逍遥」の日々であった。連日のように、夕方になると友人の下宿を訪問し、平安神宮など岡崎方面、日用品店の集まる寺町方面、丸善のある三条、円山公園・清水寺・高台寺といった東山一帯へと繰り出している。ただし日記では、これを「逍遥」とは呼ばず、「散歩」と表現している。

④衣食住

第三学年開始の9月には下宿で生活していた柳原だが、その後寄宿舎に入舎している（10.13～14）。両親宛の書簡を参照すると、一年生のときから、毎学年はじめに田中村百万遍の西村方に下宿し、その後寄宿舎に入舎するというパターンを繰り返していることがわかる。ただ、下宿生活を選んでも、寄宿舎の食堂や風呂は利用できたとみられる。前掲竹内書は、下宿生の割合が高かったのが三高の特徴であったとするが、それに加えてこの日記からわかるのが、下宿生活と寄宿舎生活との流動性・垣根の低さである。これが、皆寄宿制により閉鎖された空間で校風を養った一高と決定的に異なる点である。

卒業生奥山賢の1904年頃についての回想によると、寄宿舎の門限は夜9時で、自室前の廊下に原則和服・袴姿で並び、舎監の黙検を受けなくてはならなかった[9]。しかし、袴を前にぶら下げるだけでごまかすこともあったようである。点検後に舎生が歓送迎会などを開き大騒ぎすることもあった（11.15）。寄宿舎では総代のほか炊事委員や室長といった役員が互選によって定められたが、こうした役員のお鉢が回ってくるのは不運なことと捉えられていたようだ（11.3）。寮生活への忠誠心はあまり感じられない。

三高生の衣食に関して、今回対象とする日記前半部から読み取りうることは限られている。当時の三高生の写真を種々参照するに、和服派に対して学生服派が多数を占める時期へと切り替わったのが、二十世紀初頭であったとみられる。日記には、洋服や靴を新調したことが特記されている（11.3、11.13）。ただ、寄宿舎黙検時と同じく、図書館利用時には着袴が必要だったようだ（9.12）。食については、卵、肉、牛乳、菜、パンなどの飲食回数や数量を欄外に注記している習慣が目を引く。寮では塩鮭の夕食への抗議行動が起こったようであるが（10.31）、これがいわゆる賄征伐の類なのかどうか、詳細は不明である。

⑤郷里との関係

本稿は柳原の書簡の分析を主題とするものではないが、日記に散見する郷里とのやりとりについて、若干触れておこう。

書簡は、養父母との間に交わされたもの、および同年代の兄弟・親戚との間に交わされたものの二種に大別される。養父母に書き送った手紙は、生活の困窮を訴えて仕送りを求めたものが多数を占めることが興味深い。近況報告は住所変更や帰省の通知など最小限度にとどまっている。一方、親戚の年少者に対しては、法政大学（現在の立命館）や同志社の規則書を送るなど、進学に関する助言者役を務め（11.9）、大学生の年長者からは徴兵検査に関する情報を得るなど（10.31）、向学の若者同士の結びつきを確認できる。

Ⅱ．三高の諸行事

①演説会

日記には、種々の演説会に足を運んだことが記されている。当該期の日記には、三高の教員である厨川辰夫のほか、湯浅吉郎・谷本富・宮川経輝の市下三著名人が弁士として登場する。

1907（明治40）年11月、京都帝大と同志社の諸教授、および市の有志者が発起人となって、東洋平和協会が設立された[10]。諸人種諸国家の親善に尽くすことを趣意書に掲げ、11月11日の発会式では、原田助・末広重雄・ギューリック・谷本富の四名が演説している。式場に足を運んだ柳原であるが、日記では谷本富の演説にのみ触れている。前年の1906（明治39）年に設置された京都

帝大文科大学の一牽引者であり、1913（大正2）年には沢柳事件で大学を去ったことで知られる教育学者の谷本富であるが、平和を主題としたこのときの演説は、柳原からあまり高い評価を得ていない（11.11）。

対するに、柳原が強く感銘を受けているのが、キリスト者宮川経輝の演説である（11.18）。この日、嶽水会の主催で宮川の「実在の神」と題する講話が行われたとする『基督教世界』第1265号（1907年11月28日）の記事が、これに相当するとみられる[11]。この演説会の背景として、11月16日からの日本組合基督教会による京都集中伝道が挙げられよう。大阪教会の牧師で日本組合基督教会会長であった宮川は、私立盲唖院や吉田伝道館でも説教し、宮川とともに組合系三長老の一人であった海老名弾正も東京から入洛している。京都帝大や府医学校、府立二中でも説教は行われ、三高における演説会は、この事業の一環であった。なお、日記によれば、午後二時からの演説会にあたり、ブラッシュのラテン語の授業がわざわざ休講扱いとなっている。

湯浅吉郎および教員の厨川辰夫による演説は、三高演説討論部（後の弁論部）の主催によるものである。1901（明治34）年から京都帝大法学部講師を務めるかたわら大学附属図書館の事務嘱託を兼務した湯浅は、翌年アメリカに再留学、図書館学を学んだ。帰国後の1904（明治37）年、大森鐘一京都府知事の要請によって第四代の京都府図書館長に就任したところであった。湯浅と厨川は10月16日夜に三高講堂で開かれた演説討論部大会にて、生徒に混じって弁を振るった。日記本文は両者の論題を欠くが、『嶽水会雑誌』第38号（1907年12月）によれば、それぞれ「図書に就て」「雑感」と題する演説を行っている[12]。

なお、この大会でも生徒によるキリスト教関連の演説が二本みられ、同年度中に前述の宮川のほか、山路愛山の講演会も開催されていることから、二十世紀初頭における三高生とキリスト教との距離の近さが感じられる[13]。校内には1889年創設の基督教青年会が存在し、1900年以降、毎学年10～20名の会員を集めていた[14]。柳原の学年では、後に社会党代議士として知られた片山哲（一部法）が名を連ねている。宮川の演説の翌日に、市内諸学校の学生生徒1300名が市議事堂に集まって基督教学生大会を開催した折に参加した三高生とは、おそらくこの青年会員を中心とする面々であったと思われる。

②運動大会

三高は関西における新来スポーツ文化の一拠点でもあった。なかでも、野球の普及に果たした役割は大きい。

1880年代から、折田校長や田村初太郎といったアメリカ帰りの教員が野球の存在を伝えていたようだが、1892（明治25）年には第三高等中学校ベースボール部がすでに誕生していたことが確認されている[15]。同野球部は当初、同志社生徒や神戸在留外国人を相手としていたが、やがて対戦相手の範囲を広げ、大規模な大会も主催するようになった。1906（明治39）年は画期的な年であり、4月には東京に赴き第一回の一高戦を行ったほか、慶応・早稲田・学習院とも対戦し、11月には近隣の中学、師範、商業等二十を超える学校の生徒や神戸外国人を招いて「関西野球連合大会」を開催した。これに続く当該1907年にも、東は愛知から西は愛媛に至る府県下諸学校の連合野球大会をグラウンドで主催し、神戸クリケット倶楽部の外国人との交流戦も実施している（10.17～20、11.2）。各ゲームの結果を詳細に記録した日記からは、観戦に熱中している柳原の姿がうかがわれる。

当初は「ローンテニス」と呼ばれた庭球部も、当該1907年春には六高を迎え、高等学校同士の試合を開始し、大阪高医、大阪高商（11.4、11.9）、12月には神戸高商と相次いで試合を行うなど、

運動部としての性格を強めている。数年前までは婦女子の戯れともみなされ、部活動としては盛り上がりを欠いたようだが、かえってそれが一般生徒のレクリエーションとしての流行をもたらしたものと思われる。柳原自身、庭球部に所属はしていなかったが、しばしばこれに興じている。

秋の京都帝大大陸上運動会は、春の三高紀念祭とともに、多くの観衆を集めた催しである。三高をはじめ、師範学校、専門学校、中学校など種々の学校が参加しており、京都帝大主催による市中の学校の連合運動会といった性格をもった（『日出新聞』1907年11月10日）。三高生は、恒例の対京都帝大綱引き戦や学校対抗徒競走に参加しており、日記にはその模様が記されている（11.10）。

③修学旅行

三高における修学旅行は、第三高等中学校時代の1888（明治21）年に第一回が実施される。兵式訓練を兼ねた行軍として始まったのがこの修学旅行であり、現在とは異なり全学年を対象とした。1890年代に入ると小規模な兵式実地演習が行われるのみとなったが、1899（明治32）年に二泊三日の大津方面への大がかりな修学旅行が実施される。その後再度停滞するが、本史料が記述する1907（明治40）年の修学旅行は、改めてこれを復活させたものである。行き先は舞鶴・天橋立方面、二泊三日の行程であった（11.27～29）。はじめて汽車を利用して遠方に出かけたことが特徴であり、修学旅行の目的の変化が顕著である。海軍工廠の見学と長時間の歩行が軍事訓練的側面を残しているものの、全体として物見遊山的な気分に溢れている。

柳原の記録の末尾が「校長の悦びさも如何!!!」と幾分揶揄気味に締めくくられていることが注目される。この折の折田校長の訓示を発見できないため、『嶽水会雑誌』第4号（1900年3月）に掲載された、1899（明治32）年の修学旅行における訓示を参照しよう。折田は「文事をなすものは、勢ひ文弱の弊に陥り易し」との見解から、修学旅行の眼目はその弊害を矯正することにあると述べた。そして「旅行中には兵式体操を厳正に実行し、勉めて艱苦に耐へ、一旦緩急あれば義勇公に奉ずるの聖旨に適ふ如く、身体を錬磨するてふ、精神を発揮せざるべからず」と続ける。この狙いは、1907（明治40）年においても「修学旅行心得」[16]の中に反映され、タテマエとしては継続されていた。しかし旅行の実態は行楽的性格を強く帯び、校長の意図とはズレを生じていた。

三高における「武士的エートス」は実のところ、アメリカ留学帰りではあるものの、武芸に通じ「朴訥そのものの薩摩人」[17]であった折田校長によって担保されていたのではないか。そして生徒には、この「武士的エートス」を相対化し傍観者として受け止める余裕が存在していたものと考えられる。

小　括

以上、本史料上にあらわれる第三高等学校および当時の三高生について、背景や特性を述べてきた。柳原英の日常を、三高生一般の日常と拡大解釈することは控えねばならないし、彼の日記の後半部の検討も残されている。だがさしあたって、ひとつだけ指摘しておこう。

柳原の日常からは、一種のバランスのよさが伝わってくる。弁論部の演説会に顔を出し、野球の試合の応援にも力を入れる。キリスト教への抵抗感はみられず、テニスを楽しみ、修学旅行にも参加する。かたや一定程度の勉強も怠らない。

前掲竹内書は、主に一高を素材として、二十世紀初頭の旧制高等学校文化を把握する枠組を、運動部（的なるもの）対文芸部（的なるもの）の覇権闘争に弁論部（的なるもの）が割り込んできた時代として示す。そして文芸部と弁論部の結託のうちに教養主義が生まれ、運動部になりかわって学生文化の中心を担っていくとする。三高におい

てはどのような構図が描けるのか、改めて考えてみなくてはならないが、少なくとも柳原のような生徒を通してみる三高文化は、一高と異なり、諸エートスの分化、あるいはエートス間の先鋭な対立や昇華が起こらなかったという特徴を有するようにみえる。

最後に、この日記に「書かれていない」ことに触れておきたい。ひとつには三高をもって「自由の校風」とする認識であり、ふたつめには折田校長への賛辞である。これらはおそらく1910（明治43）年の折田校長退任を期に形成された言説であろうと見通しているが、紙数の関係上、検討は後日に譲る。この件も含め、次回は、柳原英日記の後半部（1907年12月～1908年4月）を紹介するとともに、本稿にて扱わなかった、あるいはより考察を深めるべき問題群を取り上げたい。

[註]

（1）神陵史資料研究会編『史料神陵史』（1994年）や『京都大学百年史』資料編二（2000年）で、この約三十年間に関わる重要史料が公にされている。前者は、戦前に執筆された「稿本神陵史」をもとにしている。

（2）三高卒業後の柳原についてもう少し詳細に記しておく。1912年11月に京都帝大医科大学を卒業し、翌年11月からは助手を務めた。同月に五歳年下の龍治寿恵と結婚し、やがて三人の息子をもった。1922年12月には「陰葉結核疹ニ就テ」と題する博士論文により医学博士の学位を取得している。1920年10月からは満鉄大連病院に勤務し、1924年から1926年にかけて米欧に留学した。1939年3月より大連医院の副院長を務めるが、1943年3月には帰国して京都帝国大学教授に就任し、戦争末期から敗戦直後まで在任した。1947年7月には郷里広島の県立医学専門学校付属医院皮膚泌尿器科講師となり、翌年四月からは県立附属医院本院院長を、さらに県立医科大学学長代行も務めた。1956年に退職し、個人病院での診察に携わった。

（3）三高受験から京都帝大に入学するまでの三年余の期間において、家族・親戚、友人などとの間にやりとりされた書簡は、明確に年月を考定しうるものだけで六十通程度存在する。三高時代の授業ノートは、理科系科目を中心に十冊が遺されている。

（4）以下『東京大学百年史』資料一（1984年）、『京都大学百年史』資料編一（1999年）所収の史料による。

（5）松尾巖「私の三高時代」（大浦八郎編『三高八十年回顧』〔関書院　1950年〕）

（6）『読売新聞』（1908年7月29日）に掲載（『九州大学七十五年史』史料編上巻〔1989年〕所収）。

（7）以下三高生に関する統計は、いずれも『第三高等学校一覧』より算出した。

（8）日記本文から、二部生の進学希望先についても定員オーバーの問題が起こっていたことがうかがわれるが、一高卒業生平山復二郎が、東京帝大工学部の電気や機械における試験導入の件を回想している（竹内前掲書所収）。

（9）奥山賢「諸先生を懐しむ」（前掲『三高八十年回顧』）

（10）『日出新聞』1907年11月10日、18日の記事によれば、そもそもは大日本平和協会の京都支部としての設立が構想されたものの、主張に違いがあるとして別個に設立されたのが東洋平和協会であった。趣意書と二十四条から成る会則を備え、永久平和や強制的仲裁裁判などを唱道せず、ただ人種・国際間の親善に尽力することのみをうたっていた。発起人として、原田助（同志社社長）、西村治兵衛（商業会議所会頭）、堀田康人（市会議長）、奥繁三郎（衆議院議員）をはじめ、尾崎保、オリエンティス、米田庄太郎、谷本富、末広重雄、中村栄助、ラーネッド、松本亦太郎、牧野虎次、ケリー、フェルプス、デイヴィス、佐伯理一郎、ギューリック、湯浅治郎といった、京都帝大・同志社教員を主とする名が挙がっている。三高から名を連ねたのは、校長の折田一人である。

（11）ただし、安藤勝一郎編『第三高等学校弁論部部

史』(1935年)にも、この年に宮川の演説会が開かれたことが記されており、正確には演説討論部の主催であった可能性もある。

(12) 前掲『第三高等学校弁論部部史』に、湯浅が「川柳界に於ける二大人格者」との論題下に演説したとの記録があるが、柳原日記の感想内容からみても、論題は誤りであろう。

(13) 湯浅吉郎もクリスチャンである。1858年、群馬県安中に生まれたが、同郷出身の新島襄の伝道により、兄の治郎以下、一家をあげて入信したことで知られるのが湯浅家である。吉郎は同志社に学んだ後、1885年よりイエール大学に留学し、キリスト教を学んで帰国、同志社教授および平安教会牧師を勤めた後、京都帝大に勤めた。新体詩人、琵琶奏者等々としても活躍し、「半月」の名で知られる。

(14) 長尾正昭編『第三高等学校基督教青年会百年史』(1990年)所収の在籍者名簿による。

(15) 以下、第三高等学校野球部神陵倶楽部編『三高野球部史』(1992年)を参照。

(16)『明治四十年修学旅行一件書類』(京都大学大学文書館所蔵　第三高等学校関係史料070022)

(17) 沢田源一「四十年前の追憶」(前掲『三高八十年回顧』)

【史料】　柳原英日記(上)

凡例

1．柳原英の日記の1907(明治40)年9月8日から11月30日まで、及び「両丹修学旅行之記」と題する同11月27日から29日までの修学旅行記録を翻刻した。

2．文中の旧字体は原則的に常用漢字に直し、読点、仮名遣い、濁点、(　)や傍線、改行は原文のままとした。ただし改行については一字下げに、日付けの記載は一字上げに統一してある。当時の慣習として、読点が字間の中央に振られているケースも見られるが、今日の読点の振り方に統一した。

3．〔　〕内は、翻刻者による注である。文字が間違っている箇所には、〔ママ〕もしくは正しいと思われる文字を付した。ただし当時通用したと考えられる表記については、そのまま収載している。判読不明の文字は□で示した。

4．姓のみの人名については、初出の箇所において、判明する限り下の名前を注記した。ただし、教員については別に解説をほどこしたので、注記を省略した。なお、＊を付けた人物は、柳原の同級生である。

5．本史料の欄外には、食事内容を主とした書き込みが多くある。これらについては、各日付の記述の末尾に、〔　〕でまとめて収載した。

本文

日誌

入洛の記

本九月八日も相変らず天候悪しく一時は入洛を見合せしかども午前七時頃晴天の兆候表れ剰へ風も中止の有様となりしかば健太郎を雇ひ荷物を音戸に運ばせて出発せり哀れ二三月も楽しみし故山も本日を限りに見捨てざるべからず音戸にては先づ外川方に立寄り内海丸回漕店に至りしも天候不穏の為め当船の入港は覚束無しと依て止むなく心を決して商船会社船にて尾道迄直航せんとす之れ余は兼ねて仁方に立寄らん考へなりければなり然るに十時半頃内海丸は何んなく入港次いて第二内海丸(鳥羽丸)は今日を初陣と数多の旗や幟を籤に付け満艦飾をなして勇ましく瀬戸を通過せり之れにより内海丸の競航決心の堅きを示せり午前十一時城谷正君と共に太田川丸に乗せり間もなく雨降りしも差したることなく竹原港に入りしは午後弐時頃なりき此地より宮田道雄君も来れり今迄は弐等室の城谷君なれは誰も聞へず笑ひもせず一人漠々然たりしが此時よりは時には笑ひ時には語り時には

竹原忠海等より乗船する我母校忠海中学出身の太田、堀田及他一名の諸君の渡米せらるゝ意志の偉大なるを讃して尾道に着せしは午後五時に垂んとせり（附記長濱を出て昼食す）然るに当時悪疫流行の為め上陸すること大いに捗取り宮田君の乗らんとする五時卅二分の上列車を捕へること能はざりき依て荷物を預け夕食傍々某待合所に入れり夕食後沐浴をなし寝床に入りしも容易に夢路を辿らざりき

九月九日午前十二時廿五分発上列車に乗りしも僅かに二三分の径過にて預荷物代弐日分とは重ね〳〵も余等の不注意のことどもなり夢か現かの内に天も白み初めしは姫路辺なりき舞子濱にて沖の方を眺むれば怒涛轟々として船らしきものは外国通の大汽船〔ら〕なしきもの一隻あるのみ依て宮田君が尾道より神戸迄船にて来らんとせしを中止せしを祝しつゝ神戸駅にて宮田君と別れたり之れも先日の洪水の為め小山、山北間列車不通なるが為めなり神戸にて弁当を買ひ京都着は八時頃なりき京都府愛宕郡田中村下畑中百拾三番戸西村幾次郎方に帰りて聞けば山本喜造君も京都大学入学の由大に悦びつゝ外出せんと数歩出でし処に青山莞爾君来れり依て数分の後下宿を探して分れたり本昼より寄宿舎にて食事をなし午後八つ橋を買ひて仁方に送れり本日出せし郵便物ハ相原征及親上（共に葉書）なり

九月十日

午前六時半起床直ちに朝食を終り下宿に帰りて書を繙きし時山県大君入洛せられたり聞けば山本君は明日入洛の由昼食前岡崎地方散歩中望月君に遇合せり君は本日上京の由なりそれより食堂にては、大木〔文哉*〕、梅田〔嘉四郎*〕の諸君に合ひ運動場にては田中〔国平*〕君に合ひ、ともに四方八方の談話をなして分れたりそれより帰りて湯屋に行き帰りて書を繙くこと数刻夕食に出掛けたり散歩は三条地方なりしが別に記することも無し只九銭五厘店が寺町三条にも設けられしことなり〔肉〕

九月十一日（雨天）

七時起床、本日は始業式誓宣式とやらにて新らしき帽子を戴ける人々校庭に集へり午前より正午迄は時に降り時に止みしが午後は間断なく降り時には当時の洪水を思はしめたり本日午前十時頃山本喜造君入洛せり而して相談の上当夜室を今居る南向きの四畳に移し合せて机ランプ等も当下宿屋にて借用せりとは以ての外の賜なり午後九時過臥床

九月十二日（晴天）

昨日とは打つて変ての好天気六時起床し全ての準備に七時迄を費やし学校に至れは我級生は三十名計は整へり而して諸先生の顔見せありての後本田〔理雄*〕横川〔譲*〕真下〔俊一*〕の四君と共に道を市立京都美術工芸学校の方面に取りて帰宿せり時に十時半なりき正午のドンと共に昼食に出掛け山本君と共帰〔に欠カ〕れり而して午後五時頃山本君と梅敷軍次君（吾県安佐郡深川村の人）の荷物を運び菓子の饗応を得て帰り夕食後は図書館に行きしも袴なき為大目玉とは何よりの滑稽なりき当夜聞けばかのオーミ式カラー等の製造発明人は先月死亡の為め其製造中止となれりと何んと悲くして不便なるや十時臥床〔肉〕

九月十三日（晴天）

本日は午前九時より始業するを以て八時過下宿を出で化学室に入れ〔り〕岸教授得意の口述に我が耳を驚かしたり一時間の講義の後物理（玉名教授）の口述は先づ実験をなすこととて天秤の説明をなし午後天秤の実習を開始せり終りて我校対京都一中の野球試合を見て帰宿せしは午後五時過ぎなりき夕食後大黒屋迄散歩し田中千秋〔二郎*〕辻川〔健次*〕村上〔純一*〕の諸君と共に帰路に付けり臥床十時起床六時〔本日よりパント乳　乳二合〕

九月十四日（晴天）

本日も厨川教授休講の為め午前九時よりの始業なれども七時登校す八時過浅田〔一*〕氏と共に楠君の下宿に訪れしも不幸にも食事中にて不在とや

ら止むを得ず午後昼食後楠君を訪ひ茶菓の饗応とやらにて四方八方の話草を持出し三時頃となりし頃石田蓮城君も来り談話益々佳境に入りて終に午後五時迄とは思ひ掛けなき長生(ながカ)なりき夕食後帰宿して書を開かんとせし所へ青山君来訪せしかは共に倶に散歩に出掛け三条通丸善書店に至りて円山を過ぎ帰りしは九時に垂んとせり十時迄山本君の室にて談話に時を移し十一時半頃臥床ス起床は相変らず六時〔肉〕

九月十五日（晴天）

起床七時、本日は日曜のこととて幸にも男山八幡宮の祭日なりしかは歩を男山は云ふに及ばす三宅とか其他四方の八幡宮に運ぶもの多く為めに出町橋地方は人の往来織るか如く電車も常日の寥々たるに引きかへ人山を築けり本日は林保証人を訪問せんと出でしも日曜のことなれば不在なると他の一理由とにより明日に延せり夕食後丸善支店に至りて物理化学の参考書を得て帰る時に八時過ぎなりき

臥床十時、本日三次中学校相原正風に葉書を出す、〔乳二合　玉〕

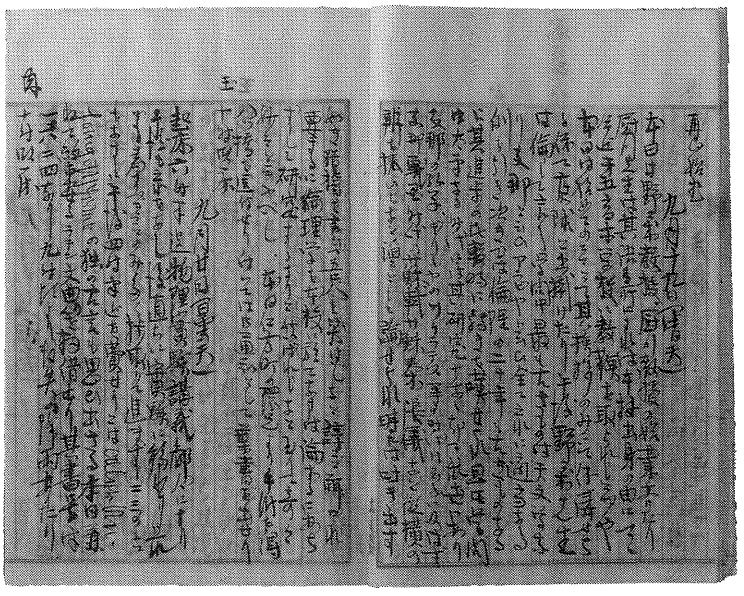
九月十六日（晴天）

起床六時、本日の体操時間には体操術即チ進行法不動の姿勢（即チ足は六十度ノコト手ハ自由）横列（前列後列ハ六十五サンチ）折敷等の差異否改良せられしことを教授せられたり大井先生は書物不着の為め休講なりしがラテンは一部二部の随意科生と講堂にて伊藤教授より始めてのラテンとは面白からんと思ひしに先生は最始よりラテンは無用にして其益少なく単に字典を引くことを知るに止まる而して医科にても多くはギリシヤ語より来れる語多くラテンは甚だ少し特に先生の謙遜せられしことゞもによりラテン習学に意志の進まざること益々甚だし臥床十時〔肉〕

九月十七日（昼は晴天なりしも夜に入りて降雨

起床六時、本日は厨川教授休講の為め午前十時より始業せり化学実けんは午後之れをなしゝが只に薬品、器具の調にて終れり午後四時過保証人林和太郎様を訪問し午後五時帰宿先生曰く京都医科は学科目は東京のそれよりも少なきも学生の患者に接するは京都勝れりと大に一考否参考になすべきことならずや

午後五時半頃楠宗道君北脇君訪問傍々余の室に来られしが同氏の薦めにより去りて寄宿舎に夕食をなせり直ちに帰宿して書を繙きしが時しも七時五十分否八時頃より降雨沛然たりき臥床十時〔玉〕



柳原英日記

九月十八日（曇天）

起床七時、時に雨はさは〳〵と降りしが洗面中には最早なく登校中と時々風と共に絹糸の如き細雨条々となりしことありしが左程のことなく体操もなしたり午後五時頃湯屋に行き帰宿後夕食は常日と変らず本日柳原晨人君より葉書（英文）を得たるを以て直ちに返書を認めて差出せり夜に入りては非常の好天気、本夜より考ふる処ありて電気帯再び始む〔電気帯を始　肉〕

九月十九日（晴天）

本日は野々村教授、厨川教授の始業ありたり

厨川先生は其語る所によれは本校出身の由にて今迄第五高等学校に教鞭を取られしとかや本日は始めてのことにて其挨拶のみにて休講せらる依て庭球と出掛けたり午後野々村先生は倫して言く学問中最も古きものは天文学なり支那と云ひアラビヤト云ひ全て之れに適当なる例を引き次きでは倫理の二十年も古きものなるに其進歩の比較的に弱きを嘆せられ且此学問は太平なる時代には其研究少なく却て乱世にあり支那の孔子、ギリシヤのソクラテス等の時代は云ふに及ばず支那戦国時代の蘇軾蘇秦張儀なと縦横の弁を振ひしなと滔々として論せられ時には吐き出す如き滑稽を言ひて吾人を笑はしなど諄々と解かれ要するに倫理学を本校に於てなすは論ずるにあらずして研究するなりと結ばれしなと至りて奇々妙々と云ふべし、本日仁方町の環兄より手紙を得八ツ橋を送付せり付いては御通知として葉書を出せり十時臥床〔玉〕

九月廿日（曇天）

起床六時半過物理実験講義都合により午後も之れをなし後直ちに実験に移れり然れども為すべきことのみ多く捗取りて進まず二三のことをなすに午後四時半迄を費せりとはAller Anfang ist schwerの独の古言も思ひ出さる本日兼ねて約束せるラテン文典を拝借せり其書号は一六二四なり九時頃より数点の降雨ありたり十時臥床〔肉〕

九月廿一日（雨天）

起床六時本日は厨川先生の初講なりしが其仕方の精巧を極めたる此有様にては前途英語の力の付くこと必然ならんと思はしめたり而して大井先生も本日よりハウケのウンヂイネに移れり夕食後横〔蕭*〕井氏の処を訪問せしに偶々千秋君が訪問せられし処にして談話打続き剰へ降雨篠を衝きしかば思はす九時五十分迄話を続け帰宿せしは十時過なりき然れども兼ねての予定ありしかは臥床十二時となりぬ只思案の種は明日の天候如何にあるのみ即ち浅田氏と叡山に上らんとす〔玉〕

九月廿二日（曇天）

大原行の記

兼ねての約束通り七時草靴はなけれども脚胖〔絆〕の軽装にて食堂に至れは浅田氏は早や食物吸入中共に朝の挨拶を交換し弁当の注文をなし食堂を出でしは八時なりき抑も本日は比叡登山の予定なりしかとも空模様の悪しきのみか一昨日来の雨天に山路さぞ険悪ならんとの臆測のもとに目的地は大原と決定し真下君を出町橋にて迎へたり其れ迄に余も草靴を求めたれは三人共極めて軽装なりしも余のみは洋傘を持ちたり大原三千院境内に入りしは曇雲四方より集りしときなりしが先づ音無の滝をと訪問しぬ猶午前十一時十分なりしかども空腹なる上好場所なりしかは其所の休憩にて昼食を済し田畑の間を通りて建礼門院大原西陵に至りしは一時半なりき此時降雨稍激しかりしかは此時始めて余の傘の必要を認めたり寂光院を訪れ帰途に付きしか中途車軸を流す降雨に遇合し一時木蔭に宿りしが三時垂んとする頃再び晴天となりしかは再び歩を進め帰りつゝありしか姥ありて手紙を頼めり此茲に於てか三人間に田舎は全てかく気らくに生活しつゝありなど語りつゝ京に入りては鐘紡の設備の完全を讃しつゝ下宿に帰りしは四時四十分なりき余は私服となして浅田君と共に食堂に入り後寄宿舎の湯とは共に久しぶりなりき後分れて帰宿せしは午後六時半、臥床は十時、〔昼〕

九月廿三日（晴天）

六時半起床昨日疲労は全く消へやらで今日今朝も何んとなく疲れ気あり登校後第二時間目ブラツシユ氏の課目のとき加〔賀〕来教授案内の下に一外国帰人入場せり聞く処によれば第七高等学校の講師とかや十分間余其有様を見学せるにや後出場せり後案内者とも云ふべきは中村教授なりき之れに基き加〔賀〕来先生は休講となり剰へ大井先

生は休講なりしかば羅典を休みにして貰ひ本日は三時間にて休日となれりそれより吉田郵便局にて金を受取り正午迄テニスをなせり午後は書物と首引きをなせしが五時過青山君訪問せられ六時過ぎ共に下宿を出で食堂に入り彼れと市中に散歩せらる君は百万遍〔遍〕正門より上る佐伯とか云ふ下宿屋に変宿せりとかや兼ねて約束の浅田君は最早影を認めず見れは通知あり曰ク楠氏の処にて待つと然るに氏の留守中のこととて再び寄宿舎に来れり余は時間の遅きを謝し共に清水寺に進みしが今だ月見ニしては此地は早ければ帰路に付き木戸孝允の墓に参詣し高台寺〔寺〕等の境内にて月を〔の〕出顔を松林の間に眺めて丸山に至り少憩の後分れ帰れり時に九時半なりき本日柳原晨人君より数枚に渡る長文の手紙を受取れり且相原正敏様に幼年画報を送れり臥床十時半迄なりき、〔豆〕

九月廿四日（半晴半曇

本日は秋期孝霊祭にて各学校は国旗を交叉して之れを祝し余は勉強して之れを祝せり午後三時過村上純一君訪問せらる午後十時臥床〔肉〕

九月廿五日（晴天）

六時起床、常の如き平凡にして別に記することなく四時湯屋に行きしは只ひとつの記事とせんか臥床十時過〔肉〕

九月廿六日（晴天）

六時起床、本日厨川先生の英語の順番余に来る、聞く処によれば厨川先生は大学卒業のとき恩賜の時計を得られし由にて本日御持来の時計即ち之れなりとかや本日化学は明日の都合により実験講義となる夕食後大黒屋に至りて無機化学を買求めたり其時丁度広田〔市五郎*〕君来られしかは共に出でゝ散歩傍々帰路に付き寺町にて分れ帰宿せり時に七時半過なりき臥床十時、

九月廿七日（晴天）

六時四十五分頃起床ありしか第一時間目は休業なりしかは左程急ぐ必要なく閑々たり本日の物理実験は案外成効せり終結せしは五時過ぎなりしかば夕食をなして帰るときに六時半なりき臥床十時〔玉〕

九月廿八日（晴天）

定刻に起き定刻に臥し実に本学期未曾有の規則正しき生活と云ふべきか従て別に記載すべき事実なし〔肉〕

九月廿九日（晴天）

本日は日曜日なるも一室に蟄居して正午迄は物理実験の報告書を作るに余念なく午後は理髪をなし寄宿の湯に入りて帰れり昨日以来昼間の炎天九月となりて〔ママ〕両つてなき暑さ殆んど閉口せりと雖も八月中のそれと比すべくもあらず夕食に行く途中千秋村上両君の旅行よりの帰途に遇ひ共に語りつゝ食堂に入り後山本君と共に寺町地方に散歩し独逸語学雑誌の送付方を注文して帰宿せしは正に八時垂んとす〔肉〕

九月三十日（晴天）〔この日の記載はすべて消跡あり〕

本日の実験講義は元来化学なりしも都合上物理講義をなせり而して実験は化学迄て帰別に記載すべきことも無し〔玉〕

十月

一日晴天

本日の実験講義は都合上物理をなせり本日は化学実験に時間を費し為めに臥床を十時半過ぎとせり〔玉〕

二日晴天

昨日以来朝夕の冷気膚に徹し昨夜の如き寒しさの余りにや足冷たくして中途目を醒すに至る依て本日より冬の襦袢を着換へたり本日は森総之助教授休講の為め午後は休業臥床十時〔玉〕

三日晴天

五時出発寄宿の湯に入り食事後寺町地方に散歩して帰る時に七時四十分頃なりき抑も数日来朝夕の冷気の為め本日より冬服上着を着ると同時ニ袷せ着物とせり然れども正午は暑さの為め

只林陰に臥して雑談するのみと云ふ有様其不順の気候察するに余りあり十時半臥床〔玉、豆〕

四日晴天

六時半起床体操は銃の掃除のみなりき而して本日は物理実けんに午後五時迄を費やしたりしが身体疲労せしか寝気交々来りしかは九時半臥床す〔玉肉〕

五日晴天

昨夜早かりし為か今朝は六時に起床す本日は森総先生休講の為め合せり大井先生も休講とし余は十一時庭球に時を費す〔や〕したり而して本日仏語研究会の〔ママ〕の一員となりて書物を注文す然し此れも組長に一任せり而して月費一人毎に拾銭の由なり本日は昨日の反比にて十一時迄勉学〔玉二〕

六日（雨天）

七時沛然たる雨に驚かされて起床し洗面後食堂に出掛けたるが降雨の甚さに歩行捗らず帰りしは八時半頃なりき然るに正午に近くに従ひ曇雲は何時の間にやら追ひやられ雨は止み晴天となりしかば霎時の散歩を取り十二時のどンと共に寄宿舎に向ひ食事後電気帯の掃除と沐浴となして帰りしは一時半依て硯に水を取りて御両親に書簡を認めて投書し虫薬の送付方を依頼せり夕食事酢を求めて燈下に親めり臥床九時半〔×玉肉〕

七日晴天

起床六時登校して見れば案に反せず森総先生休講依て体操の時間を繰上げて十一時より午後一時迄休みとせり而して本日は相変らず帰宿せしは午後三時なりき本日横井薫君より水上部の賞牌を得たり〔玉二〕

八日晴天

本日は化学実験の為め午後四時半までを費し舎の湯を終りしは五時なりきそれより急き帰宿し再び六時夕食に出掛けたり本日予習復習に追はれ十一時半頃迄燈下に親むを得たり之れ其日のことは其日になせ明日ありと思ふ心のあだ梅…の実行なり〔玉肉〕

九日雨天

昨日の影響にて起床七時なりき、本日も森総先生休講合せて雨天に付き体操も休みなりしかは午後は勿論休暇なりき

十日晴天

大井、加〔賀〕来両教授休講なりしも倫理、羅典のある為め午後三時迄在校せり本日は何んだ〔ママ〕が不快と思ひしは真なるかな夜に入りて其風邪なること定まりしかは直足用意の風薬を服用し十時二重の蒲団にて臥床ス只記せよ本日よりパンの昼食を廃して賄の飯〔飯〕とせしこと、本日豊後別府の母より書面を得たり〔玉　◎〕

十一日晴天

本日突然第一高等学校三部一同として飛報あり曰く大学入学の按分比例は不公平なり回数公平に近き二部の如き入学試験方を取るべしと、嗚呼余其何れの是か非かを知らず我同級生もかくと見□議論百出其何れに決するかを知らず終に其決定は他日に譲れり本日午後は玉名教授休講の為め余等偶数組は休暇とせり而して明日休講多きを利用して茸狩せんとの議論組長より起り投票により役員を撰選し之れに一任せり然るに夕食の時食堂に入り見れは明日は英語の教授は是非ありとの組長の回章に余は帰宿して英語の予習をなせり

豊後別府北濱通り（十月八日発ノ書信）

平野茂三郎内柳原睦子様

へ昨日の返書を認めしは午後五時頃なりき〔玉〕

十二日雨天

雨模様を掛念しつゝ登校し見れは目的地は大文字山、会費壱円とかや英語教授を済まし九時半頃雨天の如何を話つゝ校門を飛び出せり山に入れば馥郁香気鼻を打つ計りにして一寸余の目には入らず只予役員の設けし宝さがしの二枚を

得たるのみのなりしがやがて山頂に至るの頃二三の茸を得たり此度西村〔*〕要人君は抜群の勇士として知られたり。午前は之れにて休として予定の場所に集まり昼食を待受けしも何やらの都合にて準備整はず各々数個を団体を作り古食の如きカマドを作り牛肉、茸、葱を焼き始めしは一時頃なりき午前の最終高は凡五貫と目指されしが之れニ不足と云はん計りに全て分配せられ醤油砂糖は云ふに及ばす山頂の此不便の場所にありてかくの御注意の行届きしは役員たる大原〔盛三*〕、船石〔晋一*〕、石川〔玄碩*〕、横井、横川の両氏に感謝する所なり。空腹なる上に珍物なるを以て腹は満つるも口は飽かず終に最後まで居りしは余なりきか其間に宝探がしの分配に取かゝりしが余はそれどころにあらざりき否最早満腹せるなりきかかる内に四方八方には霞か雲か表はれて絹糸の如き細雨来りしもさしたる防〔妨〕害ともならさりしかは再び第二回の茸狩に出掛けしも最早茸なく空しく中途に彷徨すること数刻やがて役員の絶叫に誘はれて山に登り谷に下り終に第二の目的地に入れば一つ場所に多くの茸あり否開きたるもの計には悲感せざる得さりしが前回に劣らぬ採集ありしにより先づ先づ一と安心致せり之れにて本日の茸狩は終りとなりしと見え誰云ふとなく足は山麓に向ひ銀閣寺の前の茶屋に腰を掛けぬ時に三時半頃なり此所にて第二回目に得たるものを分配し昼食の時より引続きし細雨を侵して寄宿舎に学課道具を取り本田君と共に帰宿せしは殆んは〔ど〕五時なりき

!! 本日のWの多かりきと思いしか !!　実に役員の外交の好きにはほとほと感心仕れり得たる茸は下宿屋に譲り余は夕食は菓子にて済まし臥床は十時半なりき時に雨はいや増しに降りければ余等の幸を祝しつゝ夢路を辿りぬ〔昼夕欠〕

十三日（午前九時迄雨天、後ハ晴天）

昨日の茸狩に疲労を覚えしにも係らず本日は六時に目を醒しぬ之れ或は篠衝く雨にはあらざるか朝餐後より正午迄は化学の研究をなし午後三時には舎の湯に入り夕食を終りて帰宿せしは六時半過ぎなりき。其後霎時書を繙き〔し欠カ〕が寄宿舎に入らんかハタ入らざるかの念一寸浮び終に入舎することゝ定めぬ、かくと定まれば出来る計り早く入舎されんことを望むや切なり（附記湯に行く少し前に一寸降雨ありたり）〔菜〕

十四日晴天

本日は実際は午後三時迄課業あるべき筈なれとも加〔賀〕来、大井、伊藤の三教授休講の為め正午にて休みとなれり本日生徒監よりの呼出来れり之れ入舎許可の件なりき余は浅田君と共に南舎第四室に入ヒらんことを約して帰宿せ〔す〕嗚呼昨日の余の決心は実に時機を得たるものと云ふべし

十五日（晴天

本日の実験化学は塩素なりしかば先日奇数組の話を聞き用意稍々整頓せしも如何せん塩素瓦斯を吸入せしと見え大に困却を覚えたり依て一時間計室外に出でゝ清浄なる空気を呼吸して再び入り四時終結せり依て直ちに帰りて荷物を舎に運べり浅田君は最早来り居れて其他早川〔与一郎*〕、石田の両君も入舎せり荷物を整煩〔頓〕して湯に入り後菓子を買求め点検後入舎披露をなせり而掃除番、寝室等の規則を定めたり且又本日寄留届等四通を舎監に出せり今吾が同輩を連記せば次の如し〔以下欠〕

本日夕上様薬及金拾円を受取れり

十六日晴天

本日は始めて寄宿の朝景色を見たる故か目は五時過きより開き終に六時前に起床し六時半には最早朝餐に取掛れる次第なりき而して校庭に出で見れば盛なる哉野球選手は来りて練習しつゝありき嗚呼之れ何校ぞや而し武羅氏〔ブラッシュ〕の時間は休講としてかつて一高より申込来りし事件に付き初め大体の意見を聞きたるに三年は賛成者多く二年は賛成者多く一年は未定の有様なり此処に於てか議論滔々として起り二年よりは平野〔晋〕

小出、坂東〔板東友平〕三氏出で三年よりは田中氏を議長に置き千秋、前田〔朝二＊〕増田〔貞一＊〕、飯島〔伴之輔＊〕の諸君出で互に得意の弁を以て説破せんとす然れとも共に自己の説に固守して何時定まるとも見えざりければ止むなく時間の接迫すると共に来週月曜迄此議事を延期せり実に剣光火を見ん計なりき而して云ふも悪しきことなれとも実なれは如何せん大井教授の時間を少し早くして其残時間にて体操をなせり時に大井先生帰路に付かれ目と目と相遇〔カ〕ふの不幸に合へり嗚呼徳孤ならず必ず憐ありとかや悪をなせば必ず善き結果を得べきものにあらず何事も思考すべきことなるかな而し夜食後山本君の処に至りしに彼れ居らず帰路故山及豊後の母上に入舎及医薬到着の報告をなせり帰りて本晩の演説会に出席せり帰宿せしは十時半其演題の主なるものは左の如し湯浅京都図書館長は〔数文字欠〕の題のもとに読書をなすに其字意の了解必ら〔ず欠カ〕しも読書法の適当なるものにあらずして其著書の意を掬むにあり而して学校寄宿舎等に於て音読を禁するは之れ予算の不足に原因するものにして一教室に一人の教師と一人の生徒あらんには音読するものにて決して音読の悪しきにあらずして外部の作用より余儀なくせられしなり故に宜しく音読すべし其他図書館の感化、善悪等を西洋東洋より例を取りて論ぜられたり

次に厨川本校教授登壇せられ先づ自分の本校に関係の大きを云ひ吉田町の変遷等を説き次に高等学校時代の無意味ならざるを説きて曰く第一に高等学校時代は永久の親友を作る所第二に読書力を養ふ所特に当校は他の高等学校に比して図書館の完備せり故に大に其書の徹頭徹尾読まずとも只に其目録を〔ママ〕にても読むべし之れに於て先生は大学時代の例を引き諄々として論き去り説き来り万場拍手の下に下壇せられたり嗚呼以て大に思考すべし

其他は全て生徒演説にして今は之れを略す

十七日晴天

神嘗祭、時に曇天なりしかども終日降雨なし午前は主として自脩室に蟄居し午後は野球大会を見物せり次に本日の勝負を列記せん

京都師範対滋賀二中

彦根第三仏教中学対真宗中学

京都一中対愛知二中

明倫中学対神戸商業　2：0にて明倫の勝、

此勝負は本日の花にして当大会中の勇士なり剰へ明倫は名古屋市に於て当夏季休暇催せる近県大会に於て優勝旗を得たるものなれは其責任〔殊〕特の外重し共に関西否京都以西と以東との責任を負ひて出で勇猛驀進大に励みたれども共に其投手の競技たるに止まり殆んと他の選手の働き振を表はす時機を得さりしは特に神戸方の残念とする処あらんも仕方なし然れども其投手の上下に於ては余等門外漢の批評するの値〔ママ〕価を見ず而して其校に於ても亦伯仲せるを知る此競技間は僅に一時間に満たずして午後三時過ぎ終結を告げたり十時半臥床、〔玉二〕

十八日晴天

起床六時、正午迄は只読書せるのみ

清和中学対成器商業9＋X：8テ前者勝

丸亀中学対滋賀壱中5：9＋Xデ後者勝

神戸中学対愛知中学6：20＋X　愛知の勝

此勝負は昨日の明倫対神戸商業とに比して遜色なからんと観覧人は手に汗を握りて待ちしに開□せは左程のこともなし之れ其投手の拙劣なるに原因し四球を出すこと底なく観者をして退屈の念を起さしむ而して共にボール選手の綽名を得たり之四球の出すを以てなり而して其競技時間は一時十分なり四時過ぎ止即ち殆ん〔ド欠カ〕三時間以上を費やし為めに本日競技せんとする松山中学対大垣中学をして僅かに四回をなさしめて中止せしむるの止むなきに至る此時0：2にて大垣の優勢の位置に立てり而して〔衆〕集目の見る所も大垣を以て上手とせり嗚呼明日の結果や如何に

而して両選手は如何なる夢をや結ぶらん〔玉二〕

十九日晴天

六時起床、午前七時競技開始昨日の続きをなせしも終に三対八にて松山の負となれり同志社対滋賀商業12＋X：8同志社勝本校有志仕合は滑稽の裡に終結して次ぎは各学校選手及本校選手混合仕合ありしも何分混合なるを以て従て責任なく見る人をして汗握せしむる程もなく二時頃終りを告げ京都二中対大坂商業開始せり之れは実好取組にして九回にて共に四点を得たりしが九回の終りに京二中一点を得て結局X付きを以て京都二中の勝となる時に太陽は西天に白〔ママ〕き帰鴉塒を尋ぬるの時なりき依て帰宿後夕食をなして寺町に至り印（注文せるもの）を求めて帰歩時に七時なりき十時臥床〔玉〕

廿日（雨天

六時過起床、本日は関西野球大会の最終日なりしか早朝より曇雲叢々として起り滋賀二中対四日市商業の競技を開始せし頃は最早降雨せしも塩人形にあらずとの意気込にて雨中に競技せしも一寸珍なりき

午後も相変らず雨天否午前にも勝る降雨にも係らす鵜の目鷹の目大豆の飛び来るも見逃すまじと注意に注意を加へたる選手は此雨中に有りて奮闘せるあり之れぞ愛知二中対同志社の仕合なり余は全く見ざれとも最後の結果同志社の負けとなりしとかや

而して神戸中学対大垣中学の仕合に明日に繰越す由果して真なるや否や

廿一日　雨天

本日午前十一時即チ体操時間は雨天に付き休みなりしを幸先日より延ばせし一高に対する回答に付き三部一般講堂に集合し終に一高の建議に不賛成にて決定せり而して午後の大井、伊藤の両教授休講なりき本日午後神戸中学対本校選手の野球マツチを開始せしも両天の為め僅かに一回にて明日に延期せり川本君より葉書を受く〔本日豊後の母上よりも信書を得　玉〕

廿二日　晴天

本日は六時前に起床し午後四時迄実験室に居れり帰宿し見れば大阪市より吉田六之助宛にて頼〔惟一〕君と共にはがき来れり何事ならんと見れば嗚呼なつかしや吾出身校たる忠海中学生四年五十六名脩学旅行の為め京都に来らんとす即チ廿四日入洛すと云ふ依て直ちに頼君の下宿神谷に至り相談の結果杉本〔和一郎〕君の下宿に至りて後更らに石田君にも相談せんとて黒谷に至りいよいよ宴会にあらずして茶話会にて会費壱円として京医専の試験中にも係らず赤松君を訪問して告げしか彼れも一昨日大坂黒木君よりして其由を報告よりとの書信に接せ〔せ〕りと云へり然れども彼れは試験中にあまり雑談も好まざるのみか余輩は之れを気の毒と思ひ直ちに帰宿せり時に九時半頃にて黙検に遅刻せり而して十一時臥床ス

大坂日本橋北詰西辻角

大黒屋方吉田六之助

〔○　玉〕

廿三日　雨天

本日午後0時半一中の村竹先生を訪問して昨日のことを聞合せしが先生は精しく御説明なされたり其言に曰く

彼生徒等大坂より下市に至り終に奈良に来り明日午後三時三十五分の列車にて七条着の由而して其引率の先生は吉田六之助先生松島杢三郎先生及沢井〔数文字欠〕先生の三名の由其下宿屋は三条通大橋東入る伊せ屋方にて其案内は一中の地歴の先生のなさるゝ由

依て余等は其茶話会のことをも止むなく話すことゝなりて一時帰宿せり三時再び頼君と共に赤松君を訪問し昨日の決定を聞き法政大学に向へり之れより先き赤松君を訪問する前村〔カ〕竹君の御話により大学（医）の衛生教室勤務の田坂盛君に面会を求めたり君は白服を着て顕微鏡実け

ん中なりき直ちに其由を告げて会合を午後六時にして其賛成を得て分れたり

法政大学には知名の人ありしも在学中の人は一名もなく否あれども卒業生ならず依て止むなく鎰屋に至り茶〔ママ〕子の注文をなして帰れり時に五時半なりき（一人前十二銭）（七十名）〔玉〕

廿四日　晴天

吾出身校生徒の入洛も本日のことにて昨夜は雨天なりしがは〔かば〕之れを気使ひつゝ夢路を辿りしが本朝は雀の囀ずるまゝに床中既に目を開かざるに其晴天なるを知り最早床に臥する能はず直ちに起床して間もなきに早や晩の定時期か待遠くなり始めぬ、然るに午後頼君来りて曰く都合により七条着の時間迄延期して六時か五時半になれりと依て兼て決定せる吾人の会合の時間を七時半に延ばすの止むなきに至りぬ課業終るや否や田坂赤松、吉田君は僅か受持ち他は頼君の受持ちて所謂分業をなして傍ら余は鎰屋にて其由を告げて共に五時伊勢屋に集り更らに電車を便りに七条停車場に向ひぬ時に五時半なりき待合所に入れば村松〔竹カ〕先生は椅子に腰掛けて煙草を弄してありき依て先生に話を聞けば七条着は午後六時五分なりと依て余等は空腹を耐へてプラットホームに入りたり（入場符は村竹先生より受けたり）着車と共に水兵服を着せるを見たるときは何んと云へぬ思ひしたりき其中にて第一に遇合ひし先生は吉田六之助先生なりきかくして待合所に至れば各々学生は脱帽して余に礼を取れり而して先生は電車にて三条小橋に至らんとせられしかば村竹先生と共に奔走して終に弐車を借り直ちに分乗して伊勢屋に至りぬ時に七時に垂んとす依て余等は茶菓の準備をなして七時四十分頃先生生徒の夕食終結と共に所謂観迎会を開き頼君の開会の辞と共に吉田先生の返辞ありてそれより観山君の談話を始めとして村〔カ〕竹先生、其生徒等の□□ありて楽しく十時頃迄を費せり而て閉会後は先生の室に入りて明日の途順を決定して余等は帰れり等〔時〕に十一時なりき抑も本日は夕食をなさずして奔走し開会迄は其煩はしさの余り空腹を忘れたりしが会の始まるや否や忍耐する能はず頼君と共に残りし菓子を分けて食したる程なりき〔代菜　夕欠〕

廿五日晴天

本日は忠海中学生は京都一中先生村山先生（午前）及村竹先生（午後）の指導の下に東山より御所、東西本願寺に参詣して一同旅行を終し由然して午後三時頃のことなりき赤松君我校に来りて生徒は余寺〔等〕を本日午後七時伊勢屋にて昨日の返礼として晩餐会を開く由を告げられ曰く他の人にも之れを告けくれよと余は赤松君の試験中なるを察し直ちに之れを諾して分れ受付けにて其由を書ける葉書を受取りて頼君と相談して四時より各先輩に之れを告けんことを約し即ち大学、衛生教室にて田坂君に御〔ママ〕由を告げしに彼れ最早之れを葉書にて知りし由を話されたり由て早や報告として行くの必要を見づと両人の間に決定して大学を去らんとせし時松島先生四五名の生徒を引率して御所に向ひつゝありき余□は此のトキ案内すべきの処迷はされて之れに気付かずして帰れり実に不礼千万極まることとは帰宿後に思ひ付きしことにて後悔水泡の如しとは実にこのことなり午後六時半寄宿を出発して頼君を訪問し共に倶に伊勢屋に至り松島先生に本日の失礼を謝しやがて晩餐会は開かれたり尚席上に於ても観山君村竹君等の談話ありて吾等は九時頃散歩に出で京極に至り分れて寄宿せしは十時過ぎなりき〔玉〕

廿六日晴天

本日午前四時発の列車にて吾か同輩は出発の由なれば之れは夢の間に過ごし起床せしは六時なりき本日は計らずも大井、賀来両教授の休講ありたり而して午後は生れの〔てカ〕より始めて中村教授より仏語の教授を受け帰りしは午二時なりき十一時臥床

廿七日晴天

午前は只に自脩室に蟄居せるのみ午後浅田君と共に南禅寺に至りて香川影樹の歌会を一寸見て東山に向ひし途中梅田後藤両君に遇合せり之れより華頂山頂なる将軍塚に至り円山公園に出でゝ帰路につけり帰りて沐浴せしは三時過なりき十一時臥床本日先日の川本多市君の返書葉書を出せり〔玉〕

廿八日晴天

本日は六時廿分頃に起床しぬ近来朝晩の涼しき否寒さ膚を徹し洗面するも手の凍ぬる計なり然る〔に欠カ〕之れに反し正午に至れば朝の寒さは何処に行つたやら何んとなく夏を思ひ出す程なり本日は少し風邪の気味ありき十時臥床〔二玉　肉〕

廿九日晴天

六時起床、本日岸教授休講の為め僅か一時間にて他は休み依て一時間庭球をなして暮せり午後は別に記することもなし夕食後山本君を訪問せんと出立せしに中途彼れの散歩せりに遇合し後日を期して分れたり依て吉田町地方を散歩して帰るときに六時四十分なりき〔肉〕

卅日晴天

六時起床　夕食後吉田町の一理髪所（東門前）に入りて散髪して帰るときに六時半過ぎなりき本夜は明日武羅氏を訪問せんが為め少時間其準備をなして十一時臥床当夜飛報あり曰く明日夕食は塩鮭なるを以て全舎挙て欠食せんと余は其良否 or 其賛不賛も定まらねともとに角之れを黙して回せり〔二玉〕

卅一日晴天

六時十分過起床、午後兄上（砡）より葉書を得たり其内容に曰く本年は一年志願出来ざるを以て検査を来年とする若しくは再遊学の身とならんか今猶未定なれとも其後確報せんと余之れを知りて大に落膽せしも甲斐なし放課後浅田君と共に武羅氏を訪問せんと出でしも先づ最初の訪問なれは失敗は覚悟のことなりしが第一の失敗はグートリッチ氏の門に入り（札なき為め）て鳴鈴に〔てカ〕り婢来りて両名を名乗りしに何か出たかと思へは余は驚きたり上記の人出来らんとは余等は狼狽して英語を口を発せず黙々のうちに逃げ出でたり此とき気に障りしは武羅氏の宅を尋ねしに氏は知らずと答へられしことなり嗚呼なんぞそれ無情なる直ちに武羅氏の宅を尋ねしに此処に第二の失敗に遇合せしは氏は一寸用事ありて外出中なりと依て先〔後カ〕日を期して帰れり四時半湯に入りたり本日同室の人島田快彦君退舎の由なりしかは直ちに位置を換えて其後を追ひ余の後には浅田君来れり夕食後八時頃兄上様への返事を書きそれより勉強して十一時臥床す抑も本日は昼欠して夕は昨日のことに反して夕食せり而して他にも昨日のことを大に不便に感じて夕食なせしもの少なからず然れとも大部分は夕食せし様子なりき、〔昼欠〕

十一月

一日晴天

六時前起床、新聞によれば慶応対布哇野球団の仕合は連戦十三回にて五対三にて慶応の勝の由目出たし目出たし

本化学講義は実験講義となる之も先日休講せられ〔し欠カ〕を以てなり而して本日の物理実験は未曽有にて五時廿分帰宿せり十一時臥床、本日吉田郵便局に十円受取に行けり且賄料を払へり〔玉〕

二日晴天

六時過起床大井教授休校午後は仏語なりしも講堂の都合により物理教室にて約一時間計なしいよいよ本日の見物なる本校選手対神戸クリッケット倶楽部の仕合ありしかば之れを見んと運動場に向へり本日は土曜日とて集り来るもの多く特に外国人の参観人多く仕合開始迄は皆目さすものはそれ等の外人なりき二時半頃□□□楽隊を先きとして神戸クリッケット倶楽部は来れり先づ一寸練習して写真を連合して取りいよいよ三時に垂んとせし時三高の先攻にて仕合を開

始せり然るに彼れは数年来撰手の変換なきに引換へ本校は昨年よりは殆んどまったく新チームを作り剰へ彼れは数日前横濱のアマチヤを打敗りたる勇気を以て其勢は実に破竹の如く先づ一回にて二点を取られ更に五回になる迄に五点を取られ本校は零なりき此に於て本校大に奮起せしか六回に於て敵のミスに乗して一度に五点を得て同点となれりかくして九回を終るも共に得るところなく更に一回を加へたるも更に得ず終に十一回の終に於て我校は一点を彼れに譲り結局五点に対する六点（＋α）にて本校の負となれり時に五時過ぎなりき帰宿するや直ちに本日の会合の合図に我等は食堂に進めり時に食物は食卓に置かれ全て装飾は終れり総代の開会の辞と共に食事を始めると共に余興を開始し口には食し目には見耳には聞かざるべからざる複雑なる有様となれり然るに此会合なるや未一学期のこととて不完全極まり九時に至れば最早余興なくなりしにも係はらず総代は之を延さんと勉めしも甲斐なく終に九時閉会せり依て新聞、日誌を終して臥床す時に十一時なりき、〔菜〕

本館前にて神戸クリケット倶楽部と記念撮影

三日　雨天

五時半過ぎ起床九時式開始せる抑も早朝より雨降めしと見えたりしが八時半頃より晴天になる然るに式中再び降り始め終に本日の分列式は中止せらる午後寺町に至りて靴を買い求めたり価五円也帰りて沐湯す時に三時なりき夕食後山本君を訪問せしも相憎不在中なりきかくて帰りて捨点近くなりて突然総代、炊事員の改選とやら而して浅田君と金森君とに当選せり悲哉

本日兄上様に手紙を出せり〔玉二〕

十時臥床、

四日　曇天

六時半起床す体操は縄引きにて之れを終り直ちに郵便局に至りて帰宿し昼食をなし午後三字迄勉強して後大坂高医対本校撰手の庭球仕合ありしも本校の大勝にて高医顔色なし夕食後は石田君と丸善に至り菓屋に行きて直ちに浅田、柳原、早川の諸君と兼ねての約束通り出町上る山□内の楠宗道君の下宿を訪問せり而して雑談十時半迄となり帰宿せしとき十一時なりき其間柳原保君の談話を傍聴するが主義なりき嗚呼気炎家なる哉！！！

本日丸善にて仏英及羅英字典を求む本日故山の父上様に葉書を出し且つ柳原晨人君より封書を得たり

五日　晴天

六時過起床、朝の休暇のとき速水君来りてテニスを促かす依て余儀なく一時間はテニスにて費やし午後四時四十分頃迄化学実験室にて彷徨し帰宿して湯に入り後夕食す本日独語雑誌を受取れり十一時臥床、〔肉玉〕

六日　晴天

五時半起床、之れ昨夜来寒さの為足冷え余儀なくせられしことなり正午前故山より為替金廿円を受取れり体操は縄引にして直ちに休みとなり四時頃法政大学に行き規則書を受けて帰省せり夕食後山本君を訪問して雑談数刻下宿料を払ひて帰宿せり時に八時なりき臥床十一時、〔菜

豆〕

七日晴天

六時起床、放課後武氏〔ブラッシェ〕を訪問せしも不幸にして又もや外出中依て帰りて沐浴して勉強す本日正午吉田郵便局に至りて為替を貯金に取替へて帰れり〔玉二〕

八日晴天

六時起床物理実験は午後三時半に帰る別記することもなし十時半臥床〔夕欠〕

九日晴天

六時起床午後一時半頃より大坂高商に本校との庭球仕合あり然るに共に関西に於ける強のものにて終に日の西山に白〔ママ〕くに至るも終結せず止む〳〵明日に延引とせり本日正午柳原晨人君に早川進の名義にて封書及同志社法政大学の規則書を送れり十一時臥床、〔夕欠〕

十日晴天

五時半起床午後浅田君と永観堂南禅寺の紅葉を讃し帰りて沐浴し直ちに京都大学大陸上運動会に至りぬ時に三高対大学の縄引開始せられんとす余等は之れには余りに重きを置かざりしも何分対校特に毎年の勝負に於て大学の催には常に敗を取りしかば此度は如何と見る内に号砲と共に掛声は上りしも何れも先に引くまじと待つ内に三高は先づ始めぬかくして大学と引き始めしも我校は常に優勢の地位にありて終に三高の勝となりぬかくの商品（柿二俵）を肩に担きて運動場を半分回りて散回〔ママ〕せり其次ぎは余輩の最も重きをおける対校競走なり然れとも如何せん六高も来らず神商も来らず只に京都工芸のみなり然れとも野中〔良氏＊〕氏の日本の「レコード」を敗りて一分廿四秒にて結勝点に入りしを以て其天下に冠たるを知るべきのみ其間第一回は日下〔一郎〕氏先頂にありしも百の終りより野中氏先頭となりて一着二着共に我校の手中に落ちぬ本日は十時臥床ス〔二玉〕

十一日晴天

五時半起床、本日課業は全く休みなりき午後三時浅田君と共に武氏を訪問せり氏は余を厚遇すること極点に達し余等は何んとも云へぬ心地となりぬ之れ外人訪問の嚆矢となす帰宿せしは四時過なりき午後六時過ぎ浅田君と共に松月にての慰労会に至りしも其開会は八時頃なりき嗚呼何んぞ時を実行せざるの甚だしき八時半竊かに（密かに）飛出で浅田、前田、横川の三君と市会議事堂の東洋平和会の論説を傍聴せり最後は谷本博士にして其演題は「平和に関する三種の見界〔ママ〕」にて得意の弁にて縦横論ぜられしはよかりしが悲い哉重みなきを奈何せんや帰宿せしは午後十一時過ぎなりき〔代、夕欠〕

十二日晴天

六時起床、昨日の物理を本日なせり而して化学講義は共に実験講義となせり而して午後は済美旗の分列式を挙行せし為め休講となれり本日は牛乳券を得たるを以て同室の友と共に至りて菓子を食ひて帰る時に七時過なりき十一時臥床〔肉、玉、　本日正風□より手紙を受く〕

十三日晴天

六時起床、夕食後上木堂洋服店に至りて洋服の注文をなせり（十六日）

十四日晴天

六時起床本日午後旅行に関し役員を撰び浅田千秋両氏に当選し放課後各三年級会合して相談せり十時臥床、〔代肉〕

十五日晴天

六時起床、午後は先日分列式の為め化学実験休講なりしかは本日此実験をなせり而し当夜は、笠井〔経治郎〕、鎌田〔久市〕の両氏退舎すると共に吉田、平野の両氏入舎せり依て黙検後送迎会を催し大に騒きて十一時散会せり依て直チに臥床

十六日晴天

六時起床、夜に入りては少時勉強の後上木堂に至り洋服催促をなして帰れり而して旅行は浅田君より承れば三日間にして舞鶴宮津地方の故

而して其人数次第にて直ちに水曜日即ち廿日より出発する由嗚呼出陣者多きや否や十一時臥床〔玉〕

十七日晴天否曇天

六時起床、床を蹴つて立たんとする頃は降雨少しばかりありしも漸くにして中止したり然〔ママ〕れ猶ほ曇天なりしかば高雄紅葉狩も稍々空想に終らんとせしも時に八時半頃田中国平君来りて紅葉狩を以てす依ていよ〳〵意を決して浅田君と共に九時出発道を北野方向に取れり何と云ふも曇天のことなればとて共に両洋傘と共に弁当を手にして幾多の観客を追越して高尾に着せんとする少し此方にて千秋、村上両君に遇ひしより共に笑談して此山頂の地蔵院に着せしは十二時に垂んとする頃なりき（此頂に登る迄に志ば〳〵丁みて谷間の景色を賞しつゝ）此山頂にて千秋、村上両君は昼食には不賛成なりしかば余等二人は昼食せり其内に三名の□人来りて此景を賞し時に日本語を交へたるなど実に珍の重なるものありき余等は一時此処を発して余の二尾の紅葉を探りて帰路に付く帰路国分〔寿郎＊〕、横山、原〔正平＊〕君などの諸子に遇合せり而して椿寺の椿を見たるも本日始めてなりき帰舎せしは四時なりき臥床十時〔玉二〕

十八日　晴天

六時起床、午後二時より牧師宮川経輝先生の演説あり依て羅典は休講となれり曰く人は理想を人間□□神に有せり而して耶蘇は此神の化身なりゆえに人理想に近かんと欲せは宜しく其れに近き耶蘇を信ずべし氏か之れを信ぜしは京都同志社在学中の由なり而して最後に世に於て大成効をなせし人は全て信仰を有すと結ばれたり其間は東西古今の例を巧に引用し合せて自分の経歴を述べ特に其音声の適度余等は思はず襟を正すに至りぬ二時終結せり本日黙検後平野、吉田、大久保（氏は本日入舎）の三君の入舎疲労の茶話会を開き十一時消燈と共に床に付きぬ、〔代玉〕

十九日曇天、五時頃より降雨

六時迄起床、午後四時過迄化学実験をなして帰りて沐浴し夕食後は机に向ひて燈火に親めり本日兄上様より入営許可の葉書を得大に悦べり〔玉二〕

廿日晴天

六時起床、十一時臥床

廿一日晴天

六時起床、野村教授休講臥床十一時

廿二日曇天

六時起床本日玉名教授休講の為め化学と体操とで休暇となりたり本日黙検後南舎の会合を第一室にて催し大盛会にて十二時開散、目を閉じたは0時卅分頃なりき

廿三日曇天

六時起床、午前中は勉学し午後は数時間庭球をなせしが少々風ありしが為め面白からざりき而して夕食後黙検迄は歌を唱へて愉快に時を経しゝは実に新嘗祭に適当せると謂ふべし〔代玉二〕

廿四日晴天夕は雨天

六時起床、本日は庭球をなして疲労せしと見へ夜に入りて寝催す依て九時迄一時間床に付き十一時再び臥床ス本日別府の母上に手紙を出す

廿五日晴天

六時起床午後は終に休講とせり而して体操は教師欠席の為め出席のみにて休みとなりしかは庭球を以て暮せり夕食後は上木堂に至りし未だ調進致さず不都合千万なり十一時臥床〔豆〕

廿六日　晴天

六時起床、午後の化学実験は休講而して校長の旅行に関する注意ありて後我三部三年級の紅白庭球仕合ありしも吾が組の方敗れり夕食後散歩して後拾時臥床〔上木堂ニ洋服代を払〕

廿七日雨天

四時起床、五時装を整へて出発

七時四十分京都停車場出発此乗車頃は降雨稍や甚だしかりき旧舞鶴にて先発隊も乗車し雑談の後午後二時半新舞鶴着工〔廠〕敞を一見せしも中途吾が級の諸君と分れ気の毒にも浅田君を待たせたり依て共に（真下君と三名）暗を衝いて宿所に向ひしも夜に加ふるに雨天にて道路険悪漸くにして宿所山喜屋旅館に入りしは六時頃なりき九時過きに臥床す〔卯〕

廿八日雨天

五時起床、六時半出発相変わらず降雨最も昨日の如く甚だしからず中途風光絶佳なる地を眺めて進むうちに吾本隊に遅れ辻〔亮吉*〕及池尻〔政吉〕の両君と共に宮津町に着せしは十一時頃なりき予定の宿所北野屋旅館に至りて昼食なしゝ後浅田君を合せて四名他に一年後小酒井〔光次〕、高橋〔毅〕の両君と共に舟を艤して天橋に進みぬ而し帰宿せしは五時頃なりき直ちに湯に入りて後夕食し臥床は九時頃なりき

廿九日雨天

五時起床、舟人に聞けば此天候は当時当地方の名物なりて本日も雨天にして集合喇叭、進行喇叭ありて進軍し中途或小学校にて昼食をなし舞鶴停車場に着せしは午後弐時頃なりき四時過乗車して京都着十一時四十分而して帰宿は十二時に垂んとす直ちに湯に入りて後食事をなして臥床す時に正に一時に近き頃なりき

三十日晴天

十時半起床、聞けは当地方は廿七日を除くの方は好天気の由嗚呼異差の甚だしき人生もそれかくの如きか洗面してかくする内に早や十一時半となりしより昼食か朝食かは知らねども十二時頃食事して後勉強に掛かりぬ然るに壱時頃突然降雨ありてより寒気〔殊〕特の外に加はり一寸悲感せり然れどもスチームの通る形跡あるをたよりに夕食後日誌を書して勉学せり

豊後の母上より漸く全快に近きしを以て帰村せんとの報に接す、

記せよ本日午後六時頃雪降れり而して午後二時頃には霰降れり〔代肉〕

両丹修学旅行之記

時維れ明治四十年十一月廿七日午前四時起床の鈴と共に床を蹴つて人目も分かぬ五時廿五分吾等三部三年級の同輩は校庭を出発して途を加茂川の東側を通りて停車場に着きしは六時過ぎなりき而して霎時にして吾同友は集合し発車は七時四十分なりきやゝして汽車は藪の間を過ぎて大阪に向ひぬ其間広田君の説明にて楠公談児処なとを知れり此所は松木及石碑等ありて昔の面影を存ぜり神崎より阪鶴線となりて北に進むに従ひて山・山と相対し実に岩石馬面より起るの奇景を示し剰へ潺々たる河川は岩谷の間を過ぎて一としほの風景を飾れり然れども長蛇は足迅く走り行きて応接に遑なきは返へす〳〵も遺憾と云ふべし友人曰く実に第二耶馬溪なりと余も元来耶馬溪は知らざるも書物の語る処によりて此れに賛成を表せり其上嘆くべきは呉線と等しく隧道多くして舞鶴迄廿有余にも及べりかかるうちに宝塚温泉の仙境を眺めつつ篠山停車場に着すると共に此好景も終りを告げたり此好景を幸に時間は未だ早けれども兼ねて準備せる弁当を開きたりき

抑も本日京都停車場出発の際少し雨ありしがさしたることもなかりしも午後弐時新舞鶴着の時は降雨盛んにして下車後は下駄や傘や紙羽等を買求むるまでして実に見るも滑稽なる有様をして海軍工〔廠〕敞内に進みぬ最とも時間の遅き為め大衝突を起こし篠衝く雨のうちに木偶の如く衝立ちたる様は何んとも云へぬ光景なりきいよいよ参観となりしも案内者少数にして実に不完全極まりて吾等か同輩は余等に先ちて舞鶴の宿舎に至りぬ最も浅田君は余と真下君のために久しく門の外にて待たれしとは気の毒千万のことなりき此三人は暗を通して田の中の如き道路を進

み行くほどに隧道あり此は余が見し人道として最長のものにして剰へ内は黒々として一寸先は暗のことなれば慓然たること少時なりき而し予定の宿舎山喜屋旅館に着せしは六時頃なりき

而して夕食後は五銭の会費にて吾三部三年級一同が会合を催せり

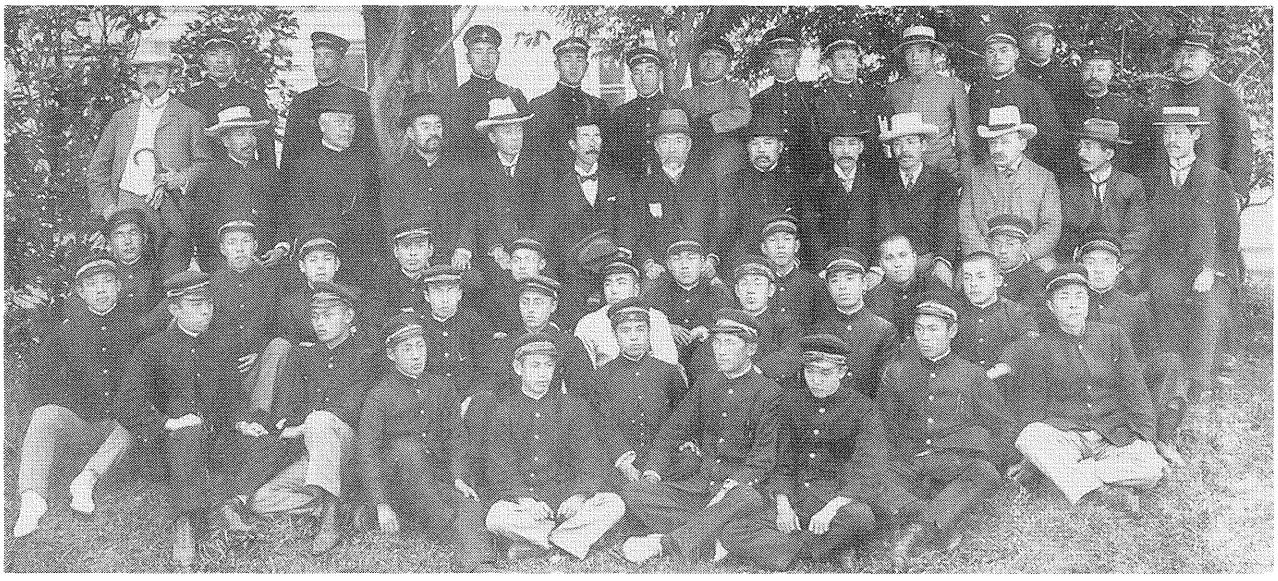
廿八日、雨天、

五字前起床朝食も早々にすまし六時半出発せしも、吾人の級は足迅く続く能はず依て中途辻、池尻両君と共に本隊を去りて宮津に向ひぬ出発の当時は一寸好天気と思ひしに中途より雨降り始めたりかくして由良の渡しを経きて由良村に出ればいよいよ日本海の沿岸に出で男波女波押しよする海岸の砂道を降りみ降らずみの内を時には外套の頭布を取りては掛け掛けては取りつゝ進む程に段々と景色は佳境となりて思はず足のためろふを知らざりきかくて先発隊の準備せる昼食所も猶早やきを以って見る見る打過ぎてやがて隧道を過ぎ遥か前面の海中を見れば天橋は霧の内に表はれたりかくて宿舎北野屋旅館に着きしは十二時に垂んとする時なりき

昼食をなして後浅田、小酒井、高橋の三君を合せて船を艤して（六十銭）天橋に向ひぬ天橋を舟つたいに進み行きし程に吾々の本隊に遇合しやがて舟を下りて成相山へと登りしも最早午前の歩行に疲労せし上に成相山も其価値なきを聞きしかば傘松迄至りて有名なる股覗をなして帰路につきぬ徒歩にて天橋を通過して文殊堂に至りて知慧の餅の薫に酔ひつゝ再び舟にて北野屋に着せしは五時なりき此所にて仁方の兄上、冠崎の晨人の君に絵葉書を送らん為め雨中郵便局に至り縞の銭袋を空にする名所を探さんと思ひしが降雨盛んなりしかば帰宿せり

廿九日　雨天、

五時過起床し出発せしは六時半頃なりき降雨も最早音を打続きしかは少しも恐れず外套堅く身を包み進軍喇叭勇ましく再び舞鶴に向ひぬかくて由良村を過ぎしかと思ふとき其所の小学校にて時間は少し早けれども之れを過ぐれば舞鶴迄昼食する場所なきを以て十時頃なりしも学校の牢（ママ）下に腰掛けて昼食し都合よく由良の渡しも過ぎ停車場に着せしは午後二時頃なり依て直ちに町に行き下駄を買ひて足を洗ひ四時過ぎ舞鶴発京都着は午後十時四十分頃なりき然るに天気は何よりの好天気只に天の無情を嘆きつゝ寄宿舎に着せしは十二時に垂んとす直ちに沐浴後食事をすまして床につけり抑も本旅行は旅行の趣意に適ひ苦難に打勝つの精神は其意を得たるものと云ふべし校長の悦びさも如何！！！



三部三年生卒業写真（1908年5月）。後ろから2列目中央灰色山高帽は折田校長、その前が日記筆者の柳原英。